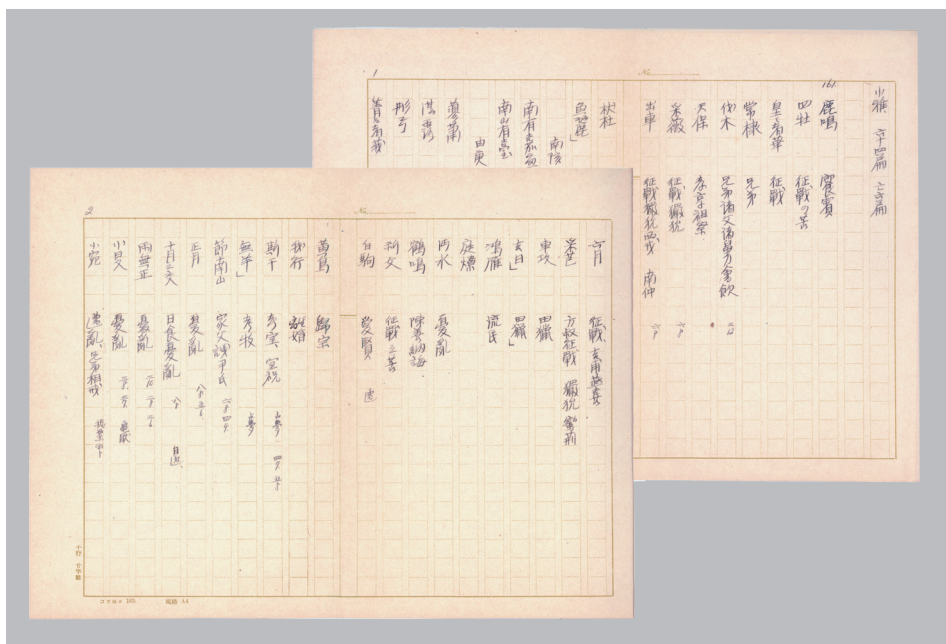


白川研究 便り



白川静博士の手稿「詩経雅頌主題」

目次 ◆ index

白川静博士の『詩経』「十月之交」の解釈	芳村 弘道	2
第十七回立命館白川静記念 東洋文字文化賞の選考結果について	大形 徹	3
漢字学研究会活動報告(二〇二三年度)	大形 徹	8
立命館大学土曜講座	大形 徹	12
日中韓漢籍研究プロジェクト活動報告	芳村 弘道	14
日本文献研究プロジェクト報告	川崎佐知子	16
二〇二三年度連続公開講座の報告	高島 敏夫	17
二〇二三年度教育活動報告	後藤 文男	17
文化事業活動報告(二〇二三年度)	久保 裕之	19
第十四回創作漢字コンテスト	加地 伸行	20
十三年目を迎えた「漢字教育士」の活動	久保 裕之	21
名古屋蓬左文庫御寄贈 『全椒古代典籍叢書』について	井上 充幸	22
研究員の最新紹介		24

第18号

発行

24.3.31

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-465-8006(事務局)
Mail ro-toyo@st.ritsumei.ac.jp
URL <http://www.ritsumei.ac.jp/research/shirakawa/>



白川静博士の『詩経』

「十月之交」の解釈

所長 芳村 弘道



二〇二四年元日に能登半島地震が発生し、多くの人々が犠牲となられた。謹んで哀悼の意を捧げる。また多数の被災者には心よりお見舞い申しあげ、一日も早く安らかな日常を取り戻されることを切にお祈りする。

一月に発生した被害甚大な地震であつたので、直ちに二十九年前の阪神淡路大震災を思い出された方も多いと思われる。日本では、その後も東日本大震災や熊本地震、北海道胆振東部地震などが相継ぐように起こつた。中国も地震の多発国であり、近くは二〇二三年末に甘肅・青海の両省にまたがる地域で、また年が明けてからは新疆でも大規模な地震が発生した。記憶に残る中国の地震としては、二〇〇八年五月の四川省汶川のもので、校舎の崩壊による多数の学童の傷ましい犠牲や日本からの救援が報道された。その年、上海での在外研究であつたが、浙江省天台県の学会から戻つて震災を知つた。上海でも高層ビルが揺れて、驚いて脱出した人が少なくなかつたとのことであつた。

中国の地震の古記録は、歴代の正史の「五行志」などに見られるが、最古の歌謡集『詩経』小雅の「十月之交」第三章にも歌われている。白川静博士の『詩経雅頌1』（平凡社、一九九八年六月）の訓読と訳を引用してみよう。

燿燿たる震電
寧（やす）からず 令（よ）からず

百川（ひやくせん） 沸騰（ふつとう）し
山（さん）家（か） 崖（が）崩（くずれ）す

高岸（かうがん）は谷（や）と爲（な）り
深谷（しんこく）は陵（りやう）と爲（な）る

哀（かな）し 今（いま）の人（ひと）
胡（なん）ぞ慚（な）ち懲（こ）ること莫（な）き

今回の地震では、その前に雷が発生したかは知らないが、第三句の「沸騰」を白川博士は「地震で地下水が噴出するのである」と注しておられる。液状化現象に相当する地異である。液状化現象のほか、第四・五

句と同じような山や崖の崩壊、第六句のような地殻の隆起が能登半島に起こつた。この詩篇を読み直してみても、今回の地震の威力がいかに恐ろしいものであつたかと思ひ知らされ、被災地の方々がその恐怖を体験されたことを想像すると胸が傷む。

この詩篇は、「十月の交、朔月、辛卯。日之を食する有り、亦孔（また）なこれ醜（あは）なり」と歌い出されている。白川博士は『詩経雅頌1』で、この詩の「主題」について、「政治詩。十月の日食を天譴として、政治の腐敗と社会の混乱を批判し、警告する。……」と述べておられる。

さらに「餘説」には、その日食の時期を解説されている。西周末の幽王期（前七八一―七七二）あるいは溯（さかの）って厲王期とする漢代の注釈、幽王六年とする清代の阮元などの説があつたが、近年に至つてオーストラリアのオッポルツェルの『日食宝典』（一八八七年刊）に依拠した平王三十六年（前七三四）説が平山清次博士によつて提唱された。しかし「西周後期の金文にみえる人名との比較から、この平山説を疑問とし」、再検討を依頼した小貫章博士の結果も同様であつたことを回顧される。そして近刊の齊藤国治氏『古天文学の散歩道』に紹介された「十月は古記

はげしいはためきと電光

不安と恐怖とが襲う

すべての川は ふきあふれ

山や岡は 崩れおちる

崖は崩れて谷となり

谷はもり上がつて陵となる

哀し 今の人よ

どうして反省しようとしなの

の七月のよみ違い」というS・Tジョンソンの説に接するに及び、「七月辛卯」の日食は幽王元年（前七八〇）の日食に合致することが判明し、幽王二年に起こった陝西地方の地震記録（『国語』周語下）とも整合性がとれ、詩経字の積年の問題が解決したことに言及されている。また「十と七は字形が甚だ近く、十の縦畫がいくらか短いものが七で、そのため誤讀が多い。……古金文の考釋にこの種の誤りが多く、このような誤讀はおそらく秦・漢以來のことであろう」とも述べておられる。

『詩経雅頌』の出版前か後か記憶が定かではないが、白川博士を訪問した折りに、「十月之交」の「十」は、実は「七」であったと伺った。長年の疑問が氷解したことを喜ぶ、熱のこもったお話しであったことが鮮明に思い出される。その後、座談会「學問の思い出—白川静博士を囲んで」（『東方學』九十九輯、二〇〇〇年一月）においても「十月之交」の「十」は「七」を誤読したものであることについて語っておられた。

本号の表紙は、「十月之交」に因んで、当研究所が所蔵する白川博士三十代ごろの手稿と推測される「詩経雅頌主題（仮題）」とした。周知のことながら、博士の詩経研究は、後に白川学に重きをなす領域として発展し、『詩経研究通論篇』『興の研究』などの論著として結実した。その萌芽ともいべき手稿である。

第十七回立命館白川静記念 東洋文字文化賞の選考結果について

立命館白川静記念東洋文字文化賞は、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が、東洋文字文化の分野における有為な人材を奨励支援するために、功績のある個人および団体の業績を表彰することを目的として

います。日本社会・文化の継承と発展、東アジアの平和と繁栄のために本賞の制定がその一助となることを願っています。

二〇二二年度も全国より応募があり、厳正な審査の結果、四名の方の受賞が決定しました。

授賞式は二〇二三年六月一七日（土）に衣笠キャンパス平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームにて、仲谷善雄総長臨席のもと執り行われました。受賞者の川合康三氏、半谷芳文氏、高井龍氏、草野友子氏には、受賞挨拶とあわせてご自身の研究について述べていただきました。

〈第十七回〉二〇二二年度募集分

立命館白川静記念東洋文字文化賞大賞

川合 康三

受賞理由

川合康三氏は日本における中国古典文学研究を長年にわたって牽引してこられた優れた研究者であり、本書『中国の詩学』（研文出版、二〇二二年五月）は、氏がこれまで積み上げてこられた中国詩学に関する重厚な研究のなかから紡ぎ出された精華とも言うべき研究成果である。本書は六〇〇頁を超える大著であり、中国古典詩における重要な諸問題の一つ一つについて丁寧な、また滋味深く論じられており、中国における「文学」とは何か、また「詩」とは何かという本質的な問題について考察されている。その考察は、これまで自明のこととされていた事柄についてももう一度基本に立ち返って問い直される深いものであり、本書で繰り返し問われているのは、詩を詩たらしめているものは何か、ということである。この問いの姿勢こそが本書を流れる基底音となっているものであり、氏の中国古典詩に向き合う姿勢にほかならないものと言えるであろう。

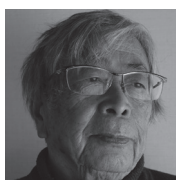
たとえば「恋愛」は中国古典文学には乏しいと言われてきたテーマであるが、川合氏はこれまで積極的にこの側面を掘り起こしてこられた。

「恋愛」を詠じた作品を特殊な珍しいものにとらえるのではなく、正統的な文学の中できちんと取扱いながら、「恋情」という詩を詩たらしめている要素に正面から向き合って論じられる。そして正統的な文学で詠じられる「友情」等と比較しながら、人が人を想うことが中国古典詩ではいかに詠じられているかについて丹念に論じられている。

本書は、一つ一つの章が相互に関連しながら中国の詩学を編み上げているだけでなく、広く「文学」とは何かという大きな問題について読者に考察を促すものであり、今後中国の古典詩を鑑賞したり研究しようとする者にとって、本書は必読の書となるであろう。

よって審査員一同は、同氏の業績に対して白川賞大賞を授与することを決定いたしました。

受賞者の声



何をするにしても、至上の欲びはその事自体のなかにあると思います。そしてその欲びはあらゆる仕事のなかにあるはずですが、社会への貢献より先にまず自分自身の充足を得られる職業であったことは、ありがたいことでした。わたしの場合などささやかな欲びに

過ぎませんが、白川静先生のお仕事を振り返ってみると、きつと先生はその世界のなかで子供のように夢中になっておられたのではないでしょう。それ以外のことは眼中になかったことでしょう。たとえば自身の意図ではなかったにしても、先生の業績は世間に歓迎され、大きな榮譽を受けられました。そうして研究の成果が広く人々に共有され、さらに次の世代に受け継がれていく結果をもたらしたと思います。お一人のなかで自足するにとどまらず、人間全体の知的財産として輝き、真の価値

を発揮することになったわけです。

『中国の詩学』にも書きましたように、中国の古典文学は伝統の規範が強く支配する文学です。その伝統は他の文化の追隨を許さない、独自で強固な価値を誇っています。しかしそれがあまりに強固であるために、そのなかに入り込まないかぎり拒絶されてしまいくるそうです。でも本当はもっと普遍的な、東とか西とかに縛られない文学性を含んでいるのではない、それを探りたいとずっと思ってきました。中国古典文学という巨大な存在に、螳螂がか細い腕を振り上げたようなものです。そんな動機から発した本ですので、独りよがりな思い込みから免れません。自分としてはぜひとも書きのこしておきたかった、しかしどれほどの方々が目を留めてくださるかかわからない、そんな本を取りあげ、賞までくださった白川静記念東洋文字文化研究所の先生方に深く感謝いたします。白川先生のお名前を冠した賞をいただくには、まことにおもはゆいものがありますが、もしもこれを機として、こんな見方もありうるんだと思つて下さる方があらわれたら、とても嬉しく思います。

立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞

半谷 芳文

受賞理由

受賞対象となった『勅撰三漢詩集の研究』（研文出版、二〇二二年五月）は、日本の八世紀から九世紀初頭にかけて出現した奉勅撰による『凌雲集』・『文華秀麗集』・『経国集』を中心に、漢詩の「総集」の編纂意義、その「抒情」的特質と、「韻律」の実態という三つの視点から、平安朝の漢詩を考察したものである。勅撰漢詩集については、小島憲之氏に研究があり、また川口久雄氏や松浦友久氏等による部分的な研究もあるが、本書はこれらの先行研究の遺漏や誤謬を大幅に修正して、本格

的に勅撰漢詩集を取り上げた貴重な研究成果である。

勅撰の「総集」という中国にも例がない様式の創出の意義について、新たな資料に基づき、唐朝の文学意識との共通性を明らかにし、同時にその異同についても論じるといふ立体的な考察がなされている。また特に「韻律」に関しては、日本漢詩文研究においてもっとも立ち遅れた分野であり、日本における漢字音受容の問題を拓く鍵ともなりうる視点でもある。日本漢字音で作品を享受しつつも中国の韻律規範に拘束されることの矛盾の意義について、今後考えるべき多くの材料を提供している。

本書は、中国における最新の研究成果も取り入れて、きわめて実証的に勅撰三漢詩集を論じたものであり、今後の日本漢詩や漢字音の研究にも裨益するところの大きいすぐれた業績であると高く評価できる。

よって審査員一同は、同氏の業績に対して白川賞優秀賞を授与することを決定いたしました。

なお著者は、本書の内容をもって、早稲田大学より博士（文学）の学位を授与されておられる。

受賞者の声

おそらく二十年くらい前のNHKの番組だったでしょうか。白川先生の研究や日常の様子が放映され、その静かで凛とし温かみのあるお人柄に、大変感銘を承けたことが忘れられません。この度、拙著『勅撰三漢詩集の研究』が、「立命館白川静記念東洋文字文化賞」優秀賞を授与されました。先生の偉業に因んだ栄えある賞を受賞できたことは望外の喜びであり、心からお礼申し上げます。

拙著は、三つの勅撰の漢詩集と私撰の『懷風藻』を、「総集」・「抒情」・「韻律」という観点から、唐を頂点とする東アジアの漢字漢文文化圏の中に捉えようとしたものです。

総集は、編撰者の詩文観とそれに基づく体例によって、序文が書かれ

作品が編纂されています。例えば『凌雲集』は、初唐で唱えられた儒家の伝統的な詩文観である「文章経国」の文芸観を掲げており、体例は作者と作品を官位順に配列していて、詩文観に沿っています。この原則は四総集とも変わりません。

圧倒的な中国の文明・文化、その精華である漢詩の制作では、先行作品に対して強い規範意識が生まれました。そのもとで作品の抒情においても多くの吸収と保持がなされましたが、単に模倣するばかりではなかったのです。女性の美しさを詠んで唯美的な抒情を持つ「奉和春闈怨」三篇はその典型的な例であり、平安人のオリジナリティある作品を詠出した、と思います。

押韻を見ると、切韻系韻書と六朝の諸韻書を混用しています。漢詩の韻律が同時期の中国の人々と同様に理解されていたわけではありませんでした。ですから唐代の韻律をそのまま当てはめて、この期の作品を評価することはできません。

奈良末・平安初頭は、後の多くの平安朝漢詩文誕生の黎明・創成期に当り、作品は本朝の人々が漢詩文を自己の表現様式にしようと努力した実態を示しています。未解明なことも多く今後の研究が俟たれますが、拙著が少しでもその礎になれば、と願う次第です。

立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞

高井 龍

受賞理由

高井龍氏はこれまで敦煌文献を研究対象として研究を進め、『敦煌写本研究年報』を中心に多数の研究論文を発表してきている。受賞対象の『敦煌講唱体文献研究―写本時代の文学と仏教』（朋友書店、二〇二二年三月）はそうした論文を再編集し、書籍としたものである。過去の研究

を丁寧に引用紹介しつつ、敦煌文書を原版で綿密に読みこみ、自分の見解を新しい視点で示すことに成功している。

第一章の「敦煌変文研究」は、敦煌文献の変文が絵解きの性格をもつこと、そして仏教の通俗化や俗講に起源があるわけではないこと、敦煌変文が主に10世紀の文献と考えられる、という。第二章では伍子胥変文写本四種、第三章では金銅醜女縁写本五種から、当時の写本の成り立ちや利用方法を検討する。第四章「十世紀敦煌文献に見る死後世界と死後審判」では「目連変文」と『十王経』から、当時の敦煌の人々の死後世界、死後審判への考え方を考察する。敦煌文献研究者が必ず検討するべき書籍である。

よって審査員一同は、同氏の業績に対して白川賞奨励賞を授与することを決定いたしました。

受賞者の声



この度は、栄えある立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞を賜りまして、厚く御礼申し上げます。これまで行ってきた研究の一つのまとめとして出版した著書に、このような評価を頂きましたこと、大変有難く存じております。

私は、敦煌文献を中心資料として、九、十世紀頃の中国の文学と仏教の研究を進めて参りました。敦煌文献とは、シルクロードの要衝たる敦煌の石窟から、一九〇〇年に発見された文献です。その中に、韻文と散文を交互に繰り返す文体「講唱体」で書かれた文献があります。本書は、主にこの講唱体文献を取り上げ、写本によって文献が伝承された時代、文学と仏教の文献がいかに書写され、また利用されたのかを探索したものです。講唱体文献は、後世に残すことを目的とした文献ではないため、様々に書き換えられることも少なくありません。そのような特徴に目を

向けることにより、当時の文学文献と仏教文献の発展変化が少しずつ浮かび上がってきました。また、敦煌の文学や仏教の理解は、中国のみならず、アジアにおける仏教の伝播の理解に資することも少なくありません。敦煌をアジアという枠組みから見つめる視座は、今後大切にしていきたいと思っています。

本書所収の論考は、様々な研究会において、多くの先生方より御指導を賜った結果であることは言う迄ありません。また、大英図書館とフランス国立図書館において繰り返し写本を調査する機会を頂いたことも、非常に恵まれたことでありました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

この度の受賞を励みとして、今後も敦煌文献研究に精進して参る所存です。皆様には、変わらぬ御指導御鞭撻を賜りますれば幸いです。

立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞

草野 友子

受賞理由

受賞対象『中国新出土文献の思想史的研究―故事・教訓書を中心として』（汲古書院、二〇二二年一月）は、中国新出土文献（特に上博楚簡と北大秦簡・漢簡）中のいくつかの文献に対して、文字の釈読、竹簡の排列、思想内容、文献の性質といった問題を検討した専著である。

凡そ中国古代出土文献の研究は、中国古典学の総合力が問われる分野である。古文字学・音韻学・訓詁学・文献学・文法・考古学など様々な分野の知識を総動員させて初めて読解することができ、そうしてようやくその文献に記されている思想や歴史などへの分析に進むことができる。近年特に中国において出土文献研究は日進月歩であり、関連する論文が一日数本というスピードで発表されている。著者は中国古代思想史

に軸足を置きつつ、主要な先行研究を整理した上で上博楚簡および北大秦簡・漢簡の数多くの文献に釈読と分析を行っており、その取り扱う分量は国内の中国出土文献研究者の中においては卓越している。多様な角度から数多くの中国出土文献に検討を行っている草野氏の一連の研究は、中国出土文献研究・中国古代思想史研究の大きな礎となることは間違いない、今後の研究にも更なる期待を抱かせるものである。

よって審査員一同は、同氏の業績に対して白川賞奨励賞を授与することを決定いたしました。

受賞者の声



このたびは荣誉ある賞を授けていただき、心より感謝申し上げます。大学院生時代から一貫して中国の新出土文献の研究に取り組み、古文字の解説に苦心する日々ですが、それが「東洋文字文化賞奨励賞」の受賞につながったと思うと、光栄の至りです。

受賞対象の拙著『中国新出土文献の思想史的研究―故事・教訓書を中心として―』（汲古書院、二〇二二年）は、一九九〇年代以降に発見された新出土文献のうち「故事」「教訓書」類を取り上げ、その成立と展開、思想史的意義を解明しようとするものです。主な研究対象は、上海博物館が所蔵する戦国時代の楚の竹簡（上博楚簡）と北京大学が所蔵する秦代・漢代の竹簡（北大秦簡・漢簡）です。その中で取り上げた上博楚簡の楚国故事は、単なる歴史故事ではなく、教訓書として意識的に編纂されたものと見られます。また、上博楚簡の魯・齊・晋に関する故事は、伝世文献との重要な相違点が見られ、伝世文献はあくまで一側面を映し出したものである可能性が高まりました。さらに、北京大学が所蔵する教訓書『周訓』と女訓書『教女』とを取り上げ、前者は儒家の傾向が強い文献であること、後者は特定の思想や学派の影響が強く見えるもので

はないことなどを明らかにしました。こうした文献からは様々な思惑を読み取ることができ、示唆に富むものと言えます。

個人的なことで恐縮ですが、研究生活においては二つのターニングポイントがありました。一つは、二〇一〇―二〇一二年に「武漢大学簡帛研究中心」で在外研究を行ったこと。それが契機となつて多くの研究者との交流の機会を得、世界が広がりました。もう一つは、出産というライフイベントにより研究中断があったこと。研究を続けられるかどうか不安でしたが、まわりの方々に支えていただき、また日本学術振興会特別研究員RPDとして立命館大学で研究できる環境を得たことで、拙著の刊行に至りました。これを一つの通過点として、一層研究に邁進したいと思います。

選考委員会

委員長 芳村 弘道（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 所長）

委員 下中 美都（株式会社平凡社 代表取締役社長）

大形 徹（立命館大学衣笠総合研究機構 教授）

加地 伸行（立命館大学衣笠総合研究機構 研究顧問）

杉橋 隆夫（立命館大学衣笠総合研究機構 研究顧問）

萩原 正樹（立命館大学文学部 教授）

上野 隆三（立命館大学文学部 教授）

漢字学研究会活動報告(二〇二三年度)

副所長 大形 徹

第一プロジェクトの漢字学研究会を中心にして、同時開催している科
研基盤研究(B)東アジア漢字文化圏の疾病・疫病観の史的・現代的
展開・鬼系病因論の起源と思想的水脈(研究代表者 大形徹)の研究会、
その他の活動について簡単に紹介する。

漢字学研究会

四月(百九回)から二月まで。キャンパスプラザ京都大学院等共同サ
テライト他で開催。



第17回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」表彰式の様子
(2023年6月17日、立命館大学衣笠キャンパス 平井嘉一郎記念図
書館カンファレンスルームにて)

後列左より後藤文男上席研究員、上野隆三教授、松本保宣教授、
平凡社 竹内涼子編集長、大形徹教授、萩原正樹教授、
松尾肇子研究員

前列左より加地伸行研究顧問、芳村弘道所長、仲谷善雄総長、
川合康三氏、半谷芳文氏代理 研文出版山本社長、高井龍氏、
草野友子氏

第一〇九回 四月一五日 二四名

・中尾徳仁「天理参考館」「道教および神仙思想に関する辟邪物―天
理参考館の所蔵資料を中心に―」

・笠川直樹…金文通解「曾伯漆壺」

第一一〇回 五月二〇日 二一名

・山田明広「大和大学」「台湾道教の疫病払いの儀礼―台湾南部地域
の「王醮」を中心に―」

・笠川直樹…「曾伯漆壺」

・山田崇仁…「歴代三寶紀」帝年に記される周王の諡號・諱について」

・末次信行…新出資料紹介

特別回 六月一七日 一九名 立命館大学衣笠キャンパス存心館ZS

二〇五教室

・百瀬佑「公益財団法人武田科学振興財団 杏雨書屋部長」「杏雨書
屋所蔵疫病関係資料について」

第一一一回 七月一五日 二一名

第一一二回 九月一七日 一九名

・志賀市子「茨城キリスト教大学」「飛鸞救劫―一九世紀中国のペス
ト禍と扶鸞儀礼」

・安東麟…「商周古文字読本」「裴衡盃」

・佐藤信弥…「荊子鼎」

第一一二回 九月一七日 一九名

第一一三回 一〇月二二日 二〇名

・小山瞳「関西大学」「病と虎について―中国説話文献を中心に―」

・佐藤信弥…「荊子鼎」

・山田崇仁…「鶯子棚関連器」

第一一三回 一〇月二二日 二〇名

・向静静「立命館アジア・日本研究機構」…「鬼」から「毒」へ…日
本における疫病観の変遷と疫病への対応」

・山田崇仁…「鶯子馮関連器」

・末次信行…「新出資料紹介」

・末次信行…「新出資料紹介」

第一一四回 一月一日 二〇名

・張如青「上海中医药大学」…「北大秦簡祝由方初探」通訳 成高雅「京都大学」

・村上幸造…「爾公鑑」

第一一五回 二月一日 阪神中哲談話会第四〇六回と共催、関大関西大学千里山キャンパス以文館 多数

・小山聡子「二松学舎大学」…「鬼による病氣とその治療—日本中世を中心として—」

・評書

・佐藤信弥『戦争の中国古代史』（二〇二二）著者 佐藤信弥「立命館大学」／評者 下田誠「東京学芸大学」（一）

・橋本敬司『人間性とは何か—中國思想のダイナミズム—』（二〇二〇）について／評者 工藤卓司「県立広島大学」

呉昌碩生誕一八〇年記念企画

・村上幸造「奈良大学」…「王家誠『呉昌碩伝』について」

・藤井郁子「奈良教育大院」…「西冷印社二二〇周年社慶大会参加報告」

・柏木知子「兵庫県立美術館」…「生誕一八〇年記念 呉昌碩の世界—海上派と西冷名家—展」

第一一六回 二月一日 二〇名

・三輪健介…「逆鐘」

二月一日 立命館大学

・陳明「北京大学」…「八分醫方」中の「論鬼瘴」與漢譯佛經中の「鬼病」相關譯語

立命館土曜講座

・山田崇仁…「出土文字資料から見える先秦史—楚国を事例として—」

一月一日

・下野玲子「早稲田大学」…「辟邪絵に見る疫鬼とそれを滅する神々」

一月二〇日

『漢字学研究』第一号

資料紹介

・德尊と邾国高柄方壺…末次信行

金文通解

・龜尊／龜卣…佐藤信弥

・衍簋・槐簋…三輪健介

・戎生編鐘…村上幸造

・楚屈子赤目…山田崇仁

・曾公編鐘…笠川直樹

学会参加記

・第九届世界漢字學會に参加して…大形徹

古文字學研究文獻提要

・唐蘭「略論西周微史家族窖藏銅器群的重要意義—

「陝西扶風新出牆盤銘文解釋」…末次信行

・李學勤「青銅器與周原遺址」…山田崇仁

・李學勤「西周中期青銅器的重要標記」…村上幸造

・劉啓益「微史家族青銅器與西周銅器斷代」…佐藤信弥

・李學勤「論史牆盤與其意義」…落合淳思

古文字學論著目

・二〇二一年古文字學論著目…横大路綾子

活動報告

・二〇二二年度 活動報告…山本優紀子・大形徹

著書

・山本堯『中国青銅器入門…太古の奇想と超絶技巧』新潮社 二〇二三年一月

・山本堯『春秋戰國時代青銅器の生産と流通に関する複合的研究』泉屋博古館 二〇二三年三月

・高橋あやの他『天文要録』の考察

大東文化大学東洋研究所 二〇二三年三月

○向静静『医学と儒学…近

世東アジアの医の交流」人文書院 二〇一三年五月 ○久保輝幸『与花
方作譜：宋代植物譜録循迹』広西科学技術出版社 二〇一三年 ○落合淳
思『古代中国説話と真相』筑摩書房 二〇一三年七月 ○大形徹「巫・靈・
壺・筮」『巫・占の異相：東アジアにおける巫・占術の多角的な研究』所収、
吉村美香編 志学社 二〇一三年八月 pp.164 ○大形徹・末次信行・
村上幸造・山田崇仁・佐藤信弥編『漢字学研究』第一号 二〇一四年
一月 ○佐藤信弥『古代中国王朝史の誕生：歴史はどう記述されてきた
か』筑摩書房 二〇一四年一月 ○大形徹・武田時昌・平岡隆二・高井
たかね『東アジア伝統医療文化の多角的考察』編、臨川書店刊、
二〇一四年二月。

論文

○松本保宣「延英殿と宰相処罰：唐文宗朝の疑獄事件を中心に」立命館
文學 = 『The journal of cultural sciences』立命館大学人文学会 編
(六八四) pp.31-53 二〇一三年六月 ○久保輝幸「本草学の分類学へ
の貢献：十九世紀以前の日本の植物の調査と記載」『東アジア比較文化
研究』(一一一) pp.17-33 二〇一三年六月 ○安永知晃他「清代后妃の
晋封形式と後宮秩序」アジア遊学 (一一八) pp.124-140 二〇一三年六
月 ○大形徹 關於左之工『世界漢字学会第九年会合議論文集』、世
界漢字学会、二〇一三年七月六日、○大形徹「『十問』云柏考」、
二〇一三年九月九日、清華大学『出土文献与漢字發展史國際學術研討会』
予稿集、北京市海淀区清華大学出土文献研究与保護中心 ○名和敏光
虎溪山漢簡札記、同上。○名和敏光 虎溪山漢簡一例占術理論與綴合、
『出土文献と漢字發展史』國際シンポジウム會議論文集、清華大学出
土文献研究与保護中心、二〇一三年九月、pp.51-62。○大形徹 特輯「東
アジア漢字文化圏の疾病・疫病観の史的・現代的展開—鬼系病因論の起
源と思想的水脈—」に寄せた 二〇一三年九月 『古代文化 = Cultura
antiqua』七五 (一)、二〇一三年九月、○大形徹「漢字文化圏の疾病観」

同左、pp.188-199、○六車楓「清華簡『五紀』に見える身体と病気の記
述について」同左、pp.221-226 ○多田伊織「痰と瘧：古代インド
医学と中国医学の交渉」同左、pp.212-220 ○『万葉集』と道教・仏教・
医学—超越的存在への憧憬と苦からの解放—共著 二〇一三年一〇月
一三回奈良県立万葉文化館委託共同研究「『万葉集』と道教・仏教・医
学—超越的存在への憧憬と苦からの解放—成果報告書」・大形徹「ま
えがき」pp.25 ・多田伊織「吉野 仙境とその周辺」pp.6-13、大形徹・
池内早紀子・山本優紀子「万葉集と水江浦嶋子—玉篋と魂をめぐる—」
pp.34-53 ・山本優紀子・池内早紀子・大形徹「万葉の竹取物語と月の
伝説と不死の薬」pp.54-63 ○大形徹「日本の饑饉と方相氏」二〇一三
年一〇月二七日「病魅：東亞視域下の医療與鬼邪」國際研討會予稿集
中央研究院歷史語言研究所 主辦單位：國科會計畫「伝統中国的『魅病』
論述與醫療策略」中央研究院史語所生命醫療史研究室 ○村田右富実「校
本万葉集」において校合の対象となっていない断簡類『萬葉』萬葉学会
編輯委員會編 (一一六) pp.59-72 二〇一三年一〇月

翻訳

○名和敏光：黄徳寛著・藪敏裕監訳『古漢字發展論』、樹立社、
二〇一三年一〇月、第六章「戦国文字」、三九七～五三〇頁。○久保輝
幸中国語訳『本草概説』、二〇一四年一月

訳注

○高橋あやの『京都大学人文科学研究所所蔵『天地瑞祥志』第七翻刻・
校注、大東文化大學漢學會誌 (六二) pp.233-288 二〇一三年三月 ○
石井眞美子、村田進、山内貴『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』譯注 (一四) 學
林/國藝文研究會編 (七六) pp.207-225 二〇一三年六月 ○黄徳寛他著、
名和敏光他訳『古漢字發展論』樹立社 ゆまに書房 二〇一三年六月
辞書項目

『漢字文化事典』丸善出版、日本漢字学会、二〇一三年一二月の辞書項目。

○落合淳思「字源と語源の関係」 pp.26-27 ○落合淳思「第二章 漢字の誕生と発展 まえがき部分 松江崇と共著 p.69」 ○山田崇仁「八卦と結縄」 pp.71-71' ○重信あゆみ「刻画符号」 pp.74-75' ○落合淳思「甲骨の発見と『鉄雲蔵龜』」 pp.76-77' ○笠川直樹「国内の甲骨文字所蔵と展示」 pp.82-83' ○落合淳思「『金文編・甲骨文編』」 pp.84-85' ○落合淳思「『甲骨文合集』」 pp.86-87' ○佐藤信弥「『殷周金文集成』」 pp.88-89' ○佐藤信弥「著名な青銅器と銘文」 pp.90-91' ○笠川直樹「国内における青銅器のコレクションと展示」 pp.92-93' ○石井真美子「孫臏兵法の発見と竹簡の整理」 pp.108-109' ○名和敏光「帛書」 pp.138-139' ○名和敏光「蔡倫以前の紙」 pp.142-143' ○笹原宏之「第四章 日本の漢字文化」 山本真吾と共著、p.157' ○笹原宏之「字種の作製 日本製漢字・国字」 pp.206-207' ○笹原宏之「社会集団・個人・場面による漢字の変異 位相文字・位相音訓・俗字」 pp.216-217' ○笹原宏之「地域による文字の変異 方言文字・方言音訓」 pp.218-219' ○笹原宏之「人名用漢字の変遷」 pp.250-251' ○大形徹「篆刻の世界 中国」 pp.400-401' ○張莉「看板に見る漢字」 pp.410-411' ○山田崇仁「第九章 漢字とコンピュータ」 まえがき 安岡孝一と共著 p.413' ○山田崇仁「日本語入力と誤変換」 pp.418-419'.

雑誌・年報等

○向静静「近世日本にもたらされた東アジア先端医学、医書、医食材：現代の薬膳や朝鮮人参へも視野を広げつつ」立命館アジア・日本研究学術年報 四 pp.92-95 二〇一三年 ○笹原宏之「令和時代の漢字と表記」『ふしぎと文字』（一六） pp.159-168 二〇一三年四月 ○佐藤信弥「『陳情令』のルーツ：仙俠と武俠」、金庸作品との関係、時代背景」すばる四五（六） pp.136-143 二〇一三年六月 ○山田明廣他「天理大學附屬天理参考館「館蔵資料から見る 神仙思想と道教」展報告」『東方宗教』日本道教學會編（一四一） pp.115-120 二〇一三年六月 ○大形徹「死

生は命なり（一）・真宰（一）・神巫（一）・意怠（一）・君子の交わり」・コラム 二〇一三年一月一日～一月十五日 東大阪新聞 八尾・柏原版 連載 莊子と語る三四～四一 ○大形徹「再生」COLUMN #1 白川学の世界 二〇一三年三月 RADIANT「特集」再生 March 2023 立命館大学研究活動報 Risumeikan University Research Report ○大形徹「脱炭素」 二〇一三年九月 RADIANT「特集」脱炭素 JSUE21 September 2023 同上 ○笹原宏之「漢字の誤字と略字、デジタル時代のあるある漢字の勘違ひ」（第一回）、『安全衛生のひろば』六四（一） pp.40-41 二〇一三年十一月。

書評

○山田崇仁 書評「戦争の中国古代史〔佐藤信弥著〕」立命館アジア・日本研究学術年報（四） pp.219-223' 二〇一三年十月 ○大形徹 書評「山本堯『中国青銅器入門—太古の奇想と超絶技巧』」 二〇一三年六月 漢字の窓 第五卷第一号（通巻九号）五八頁 日本漢字学会 ○大形徹 書評「草野友子著『中国新出土文献の思想史的研究：—故事・教訓書を中心として—』」 二〇一三年一〇月立命館 学術年報四号 立命館アジア・日本研究学術年報 四（〇）' pp.214-218' 立命館大学 アジア・日本研究所 ○安永知晃「岡田和一郎・永田拓治編『漢とは何か』」唐代史研究 唐代史研究会（一六） pp.153-156' 二〇一三年八月 研究発表

○島山奈緒子・猪飼祥夫「天回医簡からわかる漢代の医学」、京都大学人文科学研究所、第二回「中国生活文化の思想史」一班研究会 五月六日 ○島山奈緒子 京都府北部に眠る医学史料—太田典禮および新宮凉庭ゆかりの史料群—第二五回日本医師学会学術大会 二松学舎大学 六月四日 ○佐藤信弥「春秋諸侯の西周史認識」、東北学院大学、中国出土資料学会二〇二三年度第一回大会 七月一日 ○大形徹 關於左之工世界漢字学会 韓国 釜山 慶星大学 七月六日 ○大形徹「十問」云

柏考 清華大学出土文献与漢字發展史国際學術研討会、北京市海淀区清華大学出土文献研究与保護中心 九月九日 ○名和敏光 虎溪山漢簡一例占術理論與綴合、同上。○多田伊織「吉野 仙境とその周辺」万葉文化館『万葉集』と道教・仏教・医学の超越的存在への憧憬と苦からの解放 シンポジウム 一〇月二二日 ○大形徹・池内早紀子・山本優紀子「万葉集と水江浦嶋子―玉篋と魂をめぐる―」同上 ○山本優紀子・池内早紀子・大形徹「万葉の竹取物語と月の伝説と不死の薬」同上 ○大形徹「日本の饑饉方相氏」「病魅」東亞視域下的醫療與鬼邪」國際研討會 中央研究院歷史語言研究所研究大樓七〇四會議室 主辦單位・國科會計畫「傳統中國的『魅病』論述與醫療策略」・中研院史語所生命醫療史研究室 一〇月二七日。○大形徹 芝草考 韓國慶星大學、語言背後有什麼？ 第六屆漢字學國際冬令營 二〇二四年一月一七日」

講演

○大形徹 馬王堆の『胎產書』の占いについて 公益社団法人 日本易学連合会 近畿支部 四月九日 ○大形徹 庭園と蓬萊山 京都学講座 二〇二三年四月二一日 ○大形徹 中国におけるチガヤ・ススキなどの植物の役割―お月見のススキと比較して―宮崎公立大学 一〇月七日 授業

「漢字学」姫路市立生涯学習大学校 一年・二年コース

○横大路綾子○末次信行○笠川直樹○村上幸造○佐藤信弥○大形徹。

放送大学大阪学習センター、漢字学

○大形徹「書道と漢字教育」○「毛筆の指導方法」その他

○大形徹 NHK Eテレ「漢字ふむふむ」「先生」四月一八日 ○大形徹 NHK Eテレ「漢字ふむふむ」「餅」四月二五日 ○大形徹 資料提供「傘という漢字」日本テレビ特番「なんなん」一二月三日 ○山本堯 NHK「ダーウィンが来た！」お正月特集 龍のナゾ大研究！ 二〇二四年一月一四日

科研費等（代表のみ）

○山田崇仁 基盤研究（C）中国殷周金文のデジタルテキスト作成に関する基礎的研究

○山田崇仁 基盤研究（C）情報化時代における佚文収集の手法についての研究・大蔵経からの抽出を事例として

○落合淳思 基盤研究（C）漢字の部首（字素・意符）の多様性とその時代的変遷

○名和敏光 基盤研究（C）中国古代術数学における占術と儀礼研究

○村田右富実 基盤研究（C）上代特殊仮名遣いを区別した『万葉集』の複数テキスト構築とその統計学的研究

○笹原宏之 基盤研究（C）現代日本における人名使用漢字の字種・字体・読み方に関する実証的研究

○山本堯 若手研究 春秋戦国時代青銅器の生産と流通に関する複合的研究

○大形徹 基盤研究（B）東アジア漢字文化圏の疾病・疫病観の史的・現代的展開―鬼系病因論の起源と思想的水脈

○島山奈緒子 一般財団法人橋本循記念会 中国伝統文化に関する研究交流活動助成 「太田家（太田典禮生家）」史料研究会

立命館土曜講座

大形 徹

第一プロジェクトが担当した。全体のテーマは「文字と絵画」。山田は文献資料に記されない楚国の歴史について出土文字資料を駆使して考察。下野氏には科研費基盤（B）の疫病に関わる「辟邪絵」の解説をお願いした。

出土文字資料から見える先秦史―楚国を事例として

立命館大学非常勤講師／白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員

山田 崇仁



先秦時代の中国の歴史は、『尚書』・『史記』や『春秋左氏伝』などの文献資料が主要な研究材料であった。

二十世紀以降、甲骨文字の発見・青銅器銘文研究の進展・二十世紀末以降の戦国・秦漢の簡牘の獲得など、新たに発見された同時代の文字資料（古文字／出土文字資料）を用いた研究が急速に進んだ。それにより、殷・西周は出土文字資料を用いた研究が主流となり、秦漢史研究も、大量の簡牘を分析する文書学的研究法が一大分野を形成している。

ただしその間の春秋戦国時代、特に春秋時代は、その前後に比べて出土文字資料の数が相対的に少ない。青銅器に銘文を記録する風習は春秋時代以降も続いたが、定型句が多く歴史研究の材料として利用可能なものは少ない。戦国竹簡の内容は、既存の先秦史研究に大きな衝撃を与えたが、同時代史料ではないため注意を要する。そのため春秋史の研究は、後世の編纂資料を主要な研究材料とせざるを得ない状況が続いている。

このように、資料の限界に制約される春秋史研究だが、今回の講演では数少ない出土文字資料を利用して、後世の文献が拾えなかった歴史的事実や同時代の歴史認識にスポットを当てた。

「辟邪絵」に見る疫鬼とそれを滅する神々

武蔵野美術大学造形学部非常勤講師／早稲田大学教育学部非常勤講師

下野 玲子

奈良国立博物館が所蔵する「辟邪絵」は、邪悪な鬼を退治する神々が描かれた絵画です。「天刑星（てんけいせい）」「梅檀乾闥婆（せんだんけんたつば）」「神虫（しんちゅう）」「鍾馗（しゅうき）」「毘沙門天」の五つがあり、もとは平安後期～鎌倉時代（十二世紀）に制作された一巻の絵巻が切断されたものです。「天刑星」は毛髪の逆立った恐ろしい形相の神で、詞書（ことばがき）によれば「疫鬼（えきき）」をつかんで食べています。「梅檀乾闥婆」は小児の病の元凶となる鳥獸などの姿をした十五の鬼神の首を切り、鉾（ほこ）にその首を突き刺しています。「神虫」は大きな八本足の虫が鬼を押さえつけて食べるということです。「鍾馗」は端午の節句でその人形を飾る風習が知られていますが、ここでは「疫鬼」をつかまえ目をほじくり出すという、かなり凄惨な場面です。「毘沙門天」は逃げる鬼を弓矢で射落としています。これらに描かれた鬼は病を中心とする害悪をもたらす存在です。それぞれにどのような形のものが描かれており、どのような意味があるのか、中国・日本の関連作品も紹介しながら考えてみたいと思います。



R

立命館土曜講座

2024年1月テーマ
文字と絵画
1月13日
出土文字資料から見える先秦史
- 楚国を事例として
1月20日
「辟邪絵」に見る疫鬼とそれを滅する神々

企画：立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所
立命館大学非常勤講師
白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員
山田 崇仁
武蔵野美術大学造形学部非常勤講師
早稲田大学教育学部非常勤講師
下野 玲子

● 時間 15:00～17:30
● 参加費 無料・手紙申込
● 申込先 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所
TEL (075)465-8244/FAX (075)465-8245
● 主催 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所
● 会場 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所
● 文字 漢字・かな・ひらがな

「日中韓漢籍研究」プロジェクト活動報告

所長 芳村弘道

第七回東亜漢籍交流国際学術会議

当研究所は、中国の南京大学域外漢籍研究所および韓国の高麗大学校漢字漢文研究所と学術協定を結び、「東亜漢籍交流国際学術会議」の共同開催などの学術交流を進めている。二〇一九年一〇月に、高麗大学校の漢字漢文研究所の主催による第六回「東亜漢籍交流国際学術会議」が開催された後、新型コロナウイルス禍が世界を覆い、翌年に南京大学で開催される予定の第七回が延期された。三研究所の学術交流を継続させるべく、高麗大学校漢字漢文研究所がオンラインによる講演会形式での「東亜漢籍交流国際学術会議」開催を提案し、二〇二二年一月に実現された。多くの視聴者を得て成功したが、従来の対面形式の会議再開を共通して願った。

二〇二三年春になって、日中韓ともに疫情の一応の鎮静化が見られ、南京大学での第七回会議が予定された。七月に三研究所の合議の上、会議を九月一七日、学術考察を一日に行う日程、および各研究所の人員構成を発表者・コメンテーターのおの三名と定め、四年ぶりの国際学術会議が実現されることになった。日本人渡航に関する中国政府の制約により、煩瑣な手続を要したが、九月一六日に南京へ向けて出発できた。一七日の会議は、南京市郊外の仙林の新校区で開催された。南京大学文学部の董曉院長、域外漢籍研究所の張伯偉所長の開幕の辞で始まり、研究発表・講評が行われた。当研究所所員による研究発表は次の通りであった。

高井 龍「試論龍谷大學藏本《悉達太子修道因縁》」

藤田優子「《草堂詩餘》和南北曲」

六車 楓「《四書句辨》在日本的受容與修訂問題」

三研究員のこれらの発表は中国語で行われ、いずれも新進気鋭の研究者であったので、注目を受けた。また講評には次の三名が担当した（括

弧内は研究発表者と論題）。

尾崎順一郎（高麗大学校の楊沅錫氏「《六書略》対朝鮮漢字学的影響研究」）

松尾肇子（南京大学の卞東波氏「朝鮮本《宛陵梅先生詩選》与東亜漢文学対梅堯臣之評論」）

芳村（高麗大学校の沈慶昊氏「關於《星湖僿說》中对于明清書籍引証的分析」）

このほか南京大学の張伯偉「文獻・長時段・比較眼光——東亜行紀研究方法芻議」・俞士玲氏「藍芳威《朝鮮詩選》被準確記憶的詩意、詩句分析」、高麗大学校の宋好彬氏「藤塚鄰の漢学與北学派研究之視座——清朝考証学與東洋学之遠近」の研究発表がなされた。その後、漢字漢文研究所前所長の沈慶昊氏・芳村および張伯偉所長の閉会の辞をもって会議は終了した。午前九時から午後六時過ぎまで、発表・意見交換が活発に行われ、長時間であったが、改めて一堂に会しての研究交流の意義深さを実感した。

一八日の学術考察は南京市内で行われ、午前に金陵刻經処を訪ねた。ここは民国時代に設立された仏典を刻版印刷する機関で、元来、非公開のところを特別に参観できた。午後は南京図書館での過雲楼所蔵書画古籍特別展、秦淮河の科举博物館などを参観した。

会議の準備、当日の運営、学術考察の手配など、すべてに亘って南京大学域外漢籍研究所の金程宇教授の御世話になった。ここに改めて深く御礼申し上げる。

来年は当研究所が主催の当番である。一二月七・八日の開催を定めて、すでに準備を始めている。関係各位の御協力を得て、成功を収めたいと願っている。

「朝鮮渡り唐本研究」と「日中韓文人交流研究」の研究成果報告会

二〇二四年二月二四日に衣笠キャンパス存心館二〇五教室でオンライン併用によって開催、下記の研究成果の報告が行われた。

【朝鮮渡り唐本研究】

住吉朋彦（慶應義塾大学斯道文庫教授）「江戸幕府紅葉山文庫とその目録」

魯耀翰（高麗大学校研究教授）「高麗大晩松文庫藏庚子字本『西山先生眞文忠公文章正宗』書入の評點と評語について」

芳村弘道「二〇二三年度の調査報告など」

【日中韓文化交流研究】

黄美娥（国立台湾大学台湾文学研究所教授）「魏清徳与台湾文化協會—加入、脱離与転折」

魏亦均（国立台湾大学台湾文学研究所博士候選人）「台湾与朝鮮の交而不涉：乙未割台／事変後丘逢甲、金沢栄詩文及其活動比較初探」

余筠珺（国立台湾大学中国文学系助理教授）「朝鮮総督府の旅遊案内与地景書写—以《金剛山探勝案内》為例」

萩原正樹「槐南詩話」について

なお二〇二三年度における朝鮮渡り唐本と漢籍の書誌調査は、公益財団法人陽明文庫、佛敎大学図書館、大阪府立中之島図書館、上海図書館、東京古典会に赴いて実施した。

主な研究員の本年度の業績

【著書】

・松尾肇子『雅詞的受容—中日文人對宋詞的期望』（台北市・万卷樓圖書股份有限公司、文学研究叢書 詞学研究叢刊、二〇二三年八月）

【論文】

・靳春雨「和刻本元好問詩詞集的刊行及其在日本的受容探析」（靳春雨編『日中韓詞學論文集 花間集から近藤元粹まで』立命館大學アジア・日本研究所、二〇二三年六月）

・住吉朋彦

「天理図書館蔵五山版考述（二）」（『ビブリア』第一五九号、二〇二三年五月）

・「天理図書館蔵五山版考述（三）」（同第一六〇九号、二〇二三年一〇月）

・萩原正樹

「近藤南州の手記「詩餘」」（靳春雨編『日中韓詞學論文集 花間集から近藤元粹まで』立命館大學アジア・日本研究所、二〇二三年六月）

「森山東陽の詞」（『風絮』第二〇号、二〇二三年二月）

・松尾肇子

「北宋の滅亡を生きた女性詩人（李清照）」（アジア人物史4「文化の爛熟と武人の台頭」第八章、集英社、二〇二三年六月）

・魯耀翰

「朝鮮前期元好問『遺山楽府』の受容에 대하여—金時習의 예를 중심으로」（靳春雨編『日中韓詞學論文集 花間集から近藤元粹まで』立命館大學アジア・日本研究所、二〇二三年六月）

【学会・研究会発表】

・富嘉吟

「江戸末期における漢籍の流転：『竹友集』を例として」（お茶の水女子大学中国文学会例会、二〇二三年四月二二日）

「趙志集」三題」（二〇二三年中国中世写本研究夏季大会、佛敎大学、二〇二三年九月三日）

「唐李華文集流傳攷」（中國古代文学八〇後学人論壇、上海、復旦大学、二〇二三年一月二二日）

【訳注・そのほか】

・萩原正樹

「詞籍」提要「訳注稿（十二）」のうち「詞綜」「渚山堂詞話」・「龍榆

生編選『唐宋名家詞選』訳注稿（十七）」のうち廖世美「好事近（落

日水鎔金）」「燭影搖紅（霽靄春空）」李清照「浣溪沙（髻子傷春嬾更梳）」・

史達祖「臨江仙（倦客如今老矣）」・「臨江仙（愁與西風底有約）」・「齊天

樂（西風來勸涼雲去）」・「風絮」第二〇号、二〇二三年十二月

・松尾肇子

「詞籍」提要「訳注稿（十二）」のうち「嬾窟詞」「知稼翁詞」・「龍榆

生編選『唐宋名家詞選』訳注稿（十七）」のうち張元幹「蘭陵王（卷

珠箔）」辛棄疾「鷓鴣天（枕簟溪堂冷欲秋）」・「粉蝶兒（昨日春如十三

女兒學繡）」・「龍氏集評」姜夔「江梅引（人間離別易多時）」・「風絮」

第二〇号、二〇二三年十二月

・芳村弘道

「詞籍」提要「訳注稿（十二）」のうち「西樵語業」「樵隱詞」・「龍榆

生編選『唐宋名家詞選』訳注稿

（十七）」のうち劉辰翁「摸魚兒

（怎知他春歸何處）」・「伝記」・「龍

氏集評」・「風絮」第二〇号、

二〇二三年十二月・鈴木虎雄

『豹軒詩遺稿』編校（一般財団

法人橋本循記念会、二〇二四年

三月）



第七回東亜漢籍交流国際学術會議

日本文献研究プロジェクト活動報告

川崎佐知子

日本文献研究プロジェクトの二〇二二年度活動成果のひとつとして、『桂芳集』抄譯注稿（『立命館白川静記念東洋文字文化研究紀要』第十六號 二〇二三年三月）を報告した。書き出しに言及した事柄が機縁となり、二〇二三年七月末、大和文華館（奈良県奈良市）を訪ねた。同館の特別企画展「追善の美術―亡き人を想ういとなみ―」（会期二〇二三年七月七日金曜日より八月十三日日曜日まで）に、ある肖像画が出陳されると知ったためであった。「石井利延像」および「石井利昌像」の二幅である。それぞれの像主は父子で、ともに五撰家の九條家諸大夫を務めた。『桂芳集』の桂嶽宗芳の縁者にあたると。とりわけ、前者の製作には桂嶽宗芳が関与していたことがわかった。大和文華館学芸員仁方越洪輝氏のお導きに感謝する。

本プロジェクトのベースのひとつは、近衛家の漢学研究会の活動であった。二〇二二年度は、公益財団法人陽明文庫より特別の配慮をたまり、同文庫所蔵『豫樂院殿詩文集』の会読を進めた。近衛家第二十一代家熙の学問の本質を鋭意究明する目的だった。研究会の開催はハイフレックス形式とし、学内構成員のほか、海外から中国・福州大学外国語学院講師の黃鶯氏にも加わってもらった。また、中国・陝西師範大学文学学院教授の郭雪妮氏を客員協力研究員にお迎えした。昨年度に引き続き、本学大学院文学研究科人文専攻日本文学専修博士課程後期課程の高語莎氏をリサーチアシスタントに採用した。

二〇二三年度連続公開講座の報告

高島 敏夫

「金文講座」——白川静『金文通釈』に沿って」と題して、今年度は全五回を実施し、西周時代前期の金文のうち、No.54《宜侯矢戣》からNo.68《小孟鼎》までを読みました。金文の学問的な研究として質量ともに最も高いレベルを示しているのが白川静「金文通釈」です。もちろん中国の学者を含めてです。ですから「金文通釈」を読まずして、金文研究を深化させることも発展させることもありえないことなのです。公開講座に参加されている方はそのことをよくご存知で、皆さん本当に熱心に聴いておられます。ただ、「内容説明」にもお話ししたように、白川の文章が難しいために、これを独力で読みこなせている人は数えるほどしかありません。

この現状に鑑み、『金文講座』では白川の説明をできるだけ明快に説明し直すことに努めています。また白川にとっても未解明な点、未解決な点がまだまだありますので、問題の所在を把握した上で、説明することに努めてきました。例えば《宜侯矢戣》が「適省」という儀礼の次第を具体的に記録した銘文であることは、「金文通釈」ではまだ明らかにできなかったことです。しかし未解明の問題を説明するという作業は口で言うほど容易なことではありません。毎回詳細なテキストを作成するのに論文を書く時に費やすほどのエネルギーを注ぐことになりました。「金文通釈」を踏まえながらも、かなり明快な内容になっているのではないかと思います。

《金文講座》はYouTubeの動画でも実施しておりますので、これを視聴して頂くと、公開講座の予習と復習の役割を果たします

ので理解が定着するのではないかと思います。YouTubeは「高島敏夫金文講座」で検索すれば直ぐに出てきます。

二〇二三年度教育活動報告

上席研究員 後藤 文男

一、「白川静巡回展」の開催

二〇二〇年度（白川先生生誕一一〇周年）に企画したまま延び延びになつていた「白川静巡回展」をようやく京滋の学校で開催することができました。八年ぶりの巡回展となつた今回の催しでは、甲骨や青銅器のレプリカ、白川先生のパネルと自筆原稿、関連図書、金子都美絵氏のイラストパネル、欧陽可亮氏の古代文字の扁額など見どころの多い展示となり、古代文字の世界を実感できる貴重な学びの場となりました。詳細は以下の通りです。

〈開催日・場所〉

二〇二三年一月六日～二月八日 各校図書館内とその周り（写真1）

立命館守山を皮切りにほぼ一週間ずつ、一カ月かけて立命館中高、立命館小学校を巡回しました。開催中の展示品の管理も含め、設営から撤収まで、各校の司書の皆さんには本当にお世話になりました。



（写真1）立命館小学校

〈内容について〉

多様な展示品となり、コンパクトではあるが充実したラインナップとなりました。それぞれの作品に解説をつけたり、展示品の甲骨がトレースできるプリントを用意するなど、見るだけでは終わ

らない工夫を行いました。また、「紙ができるまで」と題したコーナーを作り、紙ができるまでにどのような歴史があったのか、たどることができるよう陳列の工夫もしました。

中高の生徒たちにとっても、興味深く、新鮮な驚きがあったこと、期間中その場所が芸術的な空間になっていたなど、どの学校からも好意的な感想をいただきました。(写真2)(写真3)

〈改善点など〉

多くの学校からは、とてもよい機会となったが、どのくらいの生徒たちが図書館に足を運んでくれたか、もう少し、案内の周知を図るべきだったとの声がありました。展示の期間中に「白川漢字」の授業を組んだり、図書館で授業を組んだりするなど、もっと雰囲気盛り上げる工夫が必要



(写真2) 立命館守山中高



(写真3) 立命館中高



(写真4) 立命館宇治中高

でした。(写真4)

(今後に向けて)

今年度は、京滋の附属校を対象に開催しましたが、次年度は是非北海道の立命館慶祥中高、立命館慶祥小学校や大阪の初芝立命館など系列の学校でも開催できるよう企画を進めます。

二、各学校での取り組み

(一) 立命館慶祥小学校 (写真5)

昨年度開校した北海道の慶祥小学校では、今年度も各学年年間四回ずつの「白川漢字」に取り組みました。教頭の長谷川昭先生が担当し、全学年の系統性を考慮して、パワーポイントを使った独自の授業づくりに取り組まれました。二年目ということもあり、子どもたちの中に「成り立ちとつながり」で漢字を学ぶ面白さが徐々に伝わってきているようです。とくに、先生が授業の中で力を入れておられる古代文字を実際に書いてみるという取り組みが大変有益だということです。古代文字は難しいですが、その難しさも楽しみなが、書くことを通して、「大昔の人たちの願いの深さ、思いの深さ」を感じているのではないかとのことです。次年度は六年生までそろいますが、「大昔の人々の心に寄り添える瞬間を大事にしながら三年目の実践を積み重ねていきたい」とのことです。



(写真5) 立命館慶祥小学校

(二) 立命館小学校

・全学年の副教材として伊東信夫先生の『漢字成り立ちブック』を採用

して二年目。子どもたちの「成り立ち」に対する興味・関心は高いです。その本を活用しながら、テーマを決め、各学年年間三回、「成り立ちとつながり」で学ぶ漢字の授業を後藤が行なっています。漢字を通して言葉への関心をもつてくれるよう毎回工夫をしています。

・今年度も福井県が開催する「白川静漢字教育賞」の優秀賞（川柳部門）に五年生の児童が入賞しました。児童は一人で、漢字の成り立ちをもとに一〇〇首の川柳を作りました。その川柳のどれもが的確でレベルの高い作品になっていることに感心しました。また、同時に福井県立図書館で行なわれた「集まれみんなの漢字展」に四年生一二人の古代文字の習字作品が展示されました。

・今年度もメディアセンターの岩崎先生を中心に、四年生の児童たち全員が古代文字の習字作品を「越前和紙」に書き、一月上旬から下旬まで京都祇園にある「漢字ミュージアム」で作品展を開催しました。自分の好きな漢字を古代文字で書き、消しゴムハンコで落款も作りました。どの作品も一人一人の児童の個性が光る素晴らしい作品に仕上がりました。

（写真6）

（三）その他の学校

〈立命館中高〉

中学入試説明会で、小学生を対象とした「白川文字学講座」を開催。中高で創作漢字コンテストへの応募

〈立命館守山中高〉

五月・中学一年生対象「漢字ワークシート」を用いた授業。



（写真6）立命館小学校

中学で創作漢字コンテストへの応募

三、大人を対象とした講座

（一）河内長野市「くろまろ講座」 八月 担当後藤

今年度は「京都古代文字案内」のタイトルで、京都の街にある古代文字を紹介する講座を三回にわたって行いました。毎回、三〇人〜四〇人の参加がありました。

（二）立命館小学校「RITSアカデミー講座」一二月 担当後藤

立命館小学校が行なっている大人向けの教養講座で「白川静の世界〜古代文字に触れる」のタイトルで話をしました。参加者は一四名でしたが、ちょうど小学校で「白川静巡回展」が開催されており、展示作品の紹介も兼ねて取り組みました。

以上、今年度の取り組みの報告です。「白川静展」が開催できたことは大きな成果ですが、コロナ以後、中高関係の取り組みが減っています。各校の先生方への啓蒙も含め、取り組みを強化していきたいと考えています。



立命館小学校

文化事業活動報告（二〇二三年度）

文化事業担当職員 久保 裕之

体験型漢字講座「漢字探検隊」

二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、人体や動物、植物、道

具などをテーマに、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのものになった自然や文化を学習する体験型の講座です。これまでに全国で約二五〇回開催しました。新型コロナウイルス感染症の五類感染症移行に伴い、京都・姫路・福島・仙台の講座は完全に対面型で復活しました。「福島漢字探検隊」は、福島大学澁澤尚研究室の協力をいただいています。

学内他組織との連携事業

文化事業事務局は立命館大学の衣笠キャンパス地域連携課に所属し、漢字をツールとした地域連携事業を展開していますが、立命館大学の他キャンパスの地域連携課と共同で、草津市での「漢字探検隊」の開催や「アジアウィーク」でのブース出展を行いました。また社会連携課によるオンライン大学講座「JMOOC」の「知っているようで知らない漢字のなりたち」講座の制作に協力、同講座の項目としては珍しい親子を対象とした講座で、好評を博しています。

立命館附属校教員との白川文字学に基づく漢字教材制作ワーキンググループ（詳細は別稿に）も一〇年目を迎え、現在もハイブリッドでの会合を通して附属校間の漢字教育の連携と漢字文化の涵養を図り、数年ぶりに京滋の附属校での「白川静展」巡回展示が実現。また提携校である初芝立命館中学校（大阪府堺市）への出張授業を行いました。

学外機関との連携

公益財団法人日本漢字能力検定協会（京都市）とは「漢字教育士」養成講座事業の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の広報活動や情報交換等が活発に行われ、同教師協会との「漢検漢字教育サポーター育成講座」制度を通して育成した「漢字教育士」は、同資格保有者の全体の約八割を占めています。

放送大学大阪学習センター（大阪市）の面接授業「漢字学」や大阪YMCA日本語教育センター（大阪市）の日本語教師向けオンライン講座を担当。出張講座では、今年度も京都高齢者大学校（京都市）、京都社会人大学校北近畿校（京都府福知山市）での連続講座のほか、摩気高山ことも未来塾（京都府南丹市）、山口県立山口図書館から招きを受けました。

白川静先生の出身地である福井県では、学校教育や生涯学習に「白川文字学」に基づく漢字教育を取り入れる政策を実施しており、研修や学習会が開催されています。例年「福井県白川静漢字教育賞」への協力や主催講座への講師派遣など、緊密な関係が続いています。

兵庫県の姫路市生涯大学校で開講中の「漢字学」は第八期生が入学、二年間の講義を受講します。

二〇二四年度にはそれに加え「成り立ちとつながりで学ぶ漢字」を新規開講します。また八月には大阪府河内長野市の生涯学習組織主催の講座に招かれました。



2023年7月「京都漢字探検隊一神さまと漢字」（北野天満宮）

第十四回創作漢字コンテスト

研究顧問 加地 伸行

第十四回創作漢字コンテスト（白川研と産経新聞の共催）を行ない、最優秀作品に「考えすぎ」を決めた。入選者は九十四歳の高齢者。一方、最年少七歳の幼児の入選もあった。詳細は産経新聞（二〇二三年十二月

二十二日付朝刊」に記載されている。

考

今回も二万九二七点の多数の応募があり、本コンテストが定着したと言えよう。

他新聞社が「創作四字熟語コンテスト」なるものを開催しているが、我々の「創作漢字コンテスト」において、すでに「成語成句」を中心

に「創作四字コンテスト」を行っている。
例えば、今回「漁」（うおごころあればみずごころ）、「取」（とるにたらない）という入賞作品がそれである。

漁

取

今回、と言うよりも、毎回のことであるが、その年の流行語を頭においた作品が多かったが、ほとんどが同形。これは、どこかで誰かが作ったものを物

真似している感じであるので、まずアウト。やはり自力で創造的な漢字を作ってほしい。

その意味では、中学生（十五歳）の「氣」（きにいる）や小学生（十歳）の「采」（ひらおよぎ）には、創作のおもしろさがよくでている。人まねや流行を追わず、自分の頭でとことん考えるところから〈創作〉のおもしろさが生まれてくるのだから。「人のゆく裏に道あり花の山」。

氣

采

今回、痛感したこと。学校側、具体的には、担当教員の熱意をひしひしと感じた。

すなわち、生徒一人一人が応募するのではなくて、担任あるいは担当者が、生徒の作品をまとめて投稿してきているケースが激増している点である。これはうれしい悲鳴となった。高校生以下の若い人の

投稿が劇的に増加したのは、学校（教員）側の大変な努力があったからであろう。夏休みの宿題としてもいい課題となってきたのではなからうか。

入選作品の具体例は、前記の産経新聞にでていますので、それらを重要例として、漢字教育を進めていただけることを願ってやまない。

コンテストと言えば、絵画・俳句・短歌などの作品というのがふつうであるが、それらの才能に乏しい生徒・児童らにとっては、その宿題は苦痛であろう。しかし、創作漢字は、自己自身の手を使って創作し、新しいものを生み出せる喜びがある。そういう意味で、小・中・高生の隠れた才能を引き出せる可能性がある。

そういう可能性を秘めた創作漢字コンテストにさらに多くの小中高生が参加することを期待してやまない。

十三年目を迎えた「漢字教育士」の活動

文化事業担当 久保 裕之

二〇一一年度に創設した「漢字教育士」資格認定制度もまる十二年が経過し、資格認定者数がまもなく一一〇〇名を突破します。

「漢字教育士」とは、漢字の成り立ちや文化的背景、現代の漢字・日本語の状況を理解し、幅広い知識を有するとともに、「教える力」を身につけた方です。漢字の楽しさを知った方が、それを伝えることにより、世の中に漢字文化の種をまき、花を咲かせようという思いから、この資格は生まれました。日本の社会においては、漢字・日本語は老若男女にかかわらず広く使われる媒体です。「漢字教育士」の活動が、人々の交流を広げ、絆を強めるものになることを期待しています。

漢字教育士資格認定講座の方式は、①指定機関での指定科目の修了、②漢字教育士資格認定ウェブ講座の修了の二つです。

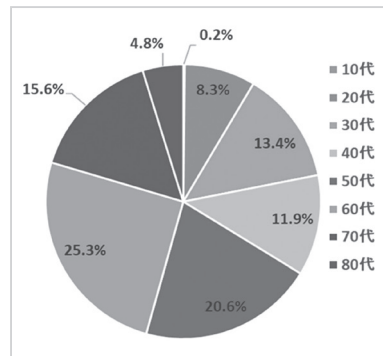
指定機関としては、放送大学大阪学習センターでの面接授業「漢字字」が毎学期開講されており、毎回関西地方をはじめとする全国からの聴講申込のある科目となっています。八単位取得が「漢字教育士」資格取得の条件となっており、その取得には最短四年かかりますが、地道に単位を取得して「漢字教育士」の取得をされた方も六名いらっしゃいます。また姫路市生涯学習大学校では、二〇一六年度より二年コースの「漢字学」が開講しました。コロナ禍においても現在第七期生・第八期生併せて六六名の方が対面講座で学んでおり、これまでに二五名の方が試験に合格され、資格を得ています。

ウェブ講座は二〇一六年二月より立命館アカデミックセンターの直営講座の一つとして行われています。また公益財団法人日本漢字能力検定協会（漢検協会）との提携も大きな効果を上げています。漢検協会は漢検受検で培った個人の漢字能力を社会に還元できる人材を育てようと「漢検漢字教育サポーター」制度を二〇一二年に創設、「漢検漢字教育ネットワーク」会員の中から毎年選抜されて毎年四月から翌年三月までの期間一年で本講座を受講しています。二〇二一年度をもって最終期・第十期の受講が終了しましたが、漢検協会とは以降も新制度を創設し、受講開始時期と期間を受講者の希望により選択できるようにし、引き続き学びの場を提供していきます。漢字教育士にはオンラインでの情報提供や交流会の開催、「漢字探検隊」での講師やスタッフ業務参加などの機会を設けて、フォローを行っています。漢字教育士の有志により、小学一年の配当漢字八〇字の成り立ちを『おしえて漢字くん』という軽快な歌に仕上げ、YouTubeで公開しています。

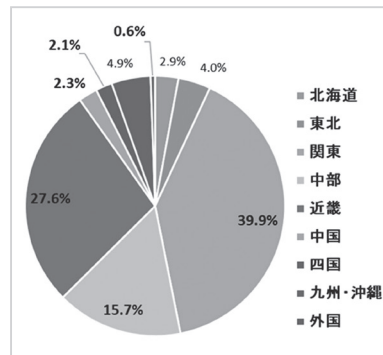


漢字教育士は二〇二三年末現在一〇九二名で、全国四十七都道府県そして海外五か国に在住しています。内訳は名誉漢字教育士二名（白川静先生と武田鉄矢氏）と特別認定者二一名、課程修了による認定者一〇六九名です。そのうち、課程修了による認定者の内訳は左の表の通りです。

年齢別統計



登録住所地方別統計



名古屋市蓬左文庫御寄贈『全椒古代典籍叢書』について

本学文学部教授 井上 充幸

二〇二三年の九月、白川研は名古屋市蓬左文庫より『全椒古代典籍叢書』全二一冊（北京・国家図書館出版社、二〇一八（二〇二〇刊）の寄贈を受けました。この大部の叢書の受け入れ実現については、ことの発端に筆者が関わっていることから、その経緯について簡単に紹介させていただきます。

二〇二二年度より、筆者は本学人文科学研究所助成プログラムによる

支援を受け、蓬左文庫が所蔵する明拓『銅人腧穴鍼灸図経』およびその裏張りに使用されている明代官文書の研究に着手しました。そして二〇二三年度にはJSPS科研費（23H00661）に採択され、この拓本の来歴と裏張文書の読解、さらには料紙の素材分析に至るまで、蓬左文庫のみならずの全面的なご理解とご協力に支えられつつ幅広く研究を進めているところです。

そうした最中、二〇二三年の六月末に、蓬左文庫学芸員の星子桃子氏から、『全椒古代典籍叢書』の引き取りの打診が筆者に届きました。それによると、この叢書の出版にあたって蓬左文庫所蔵の『泰昌全椒県志』四巻が底本として使用されたため、出版元から全冊一式まるごと献本されてきたそうです。蓬左文庫としては、収蔵規定および収蔵スペースの関係から、自館所蔵の『泰昌全椒県志』影印本二冊のみを保存し、残りの一九九冊は原則廃棄せざるをえないので、もし必要であれば無償で譲りしたいとのことでした。

譲渡の条件としては、引き取り側が送料を全額負担することのみだったのですが、問題は、取り置きを七月いっぱいまでとせざるを得ない、ということにありました。当然ながら筆者一人の手に負えず、同僚の萩原正樹教授に相談したところ、ただちに芳村弘道所長に話を通してくださったおかげで、白川研への受け入れが短時間のうちに実現する運びとなりました。さらにその後、蓬左文庫の計らいにより『泰昌全椒県志』影印本二冊もあわせてご寄贈いただいたことから、白川研は晴れて『全椒古代典籍叢書』全冊を所蔵する日本国内で唯一の機関となるに至ったのです。

次に、『全椒古代典籍叢書』について簡単に紹介いたします。

全椒とは、中国安徽省東部に位置する滁州市南部にある県の名称ですが、ここは長江を挟んで南京の西に隣接していることから、古来多くの文人を輩出してきました。この叢書はそうした全椒にゆかりの深い書籍

を総合的に集めたもので、次の一八種を収録しています。

『薛時雨集』四〇冊・『吳敬梓集』五冊・『憨山大師集』三〇冊・『金兆燕集』六冊・『吳煥集』三冊・『洪武正韻』一冊・『金和集』四冊・『西墅草堂遺集』一冊・『全椒旧志匯編』一一冊・『吳鼎集』一四冊・『江臨泰集』三冊・『王肇奎集』三冊・『楊于庭集』五冊・『薛春黎集』三冊・『金望欣集』三冊・『吳鉞集』一冊・『吳国縉集』六冊・『総合巻』六二冊

末尾の『総合巻』には、南唐・北宋の張洎『賈氏談録』明鈔本から清の金啓南撰・王鳴盛評・吳煥注『応制体詩』清刻本に至るまで、歴代の全椒出身者の手になる著述が収められています。中でも目を引くのが、吳敬梓『儒林外史』の嘉慶二年（一八一六）藝古堂刻本・同治八年（一八六九）群玉齋木活字本・潘祖蔭補筆の清鈔本、以上の三種が一同に会しているところです。このように、本叢書は詩文・天文・暦算・金石・仏教・地方志など、主に明代後半期から清代全般にかけての幅広い学問分野にわたる著述を集めたもので、いずれも中国内外に所蔵される貴重な版本・鈔本を底本とし、日本国内の図書館などにはあまり所蔵されていないものも多数収録されています。

この貴重な白川研所蔵『全椒古代典籍叢書』がこれから積極的に利用され、本学における中国学研究の発展に寄与していけるよう、いささかなりとも拙文がお役に立てば幸いに存じます。



研究員の 新刊紹介

向静静『医学と儒学——近世東アジアの医の交流』

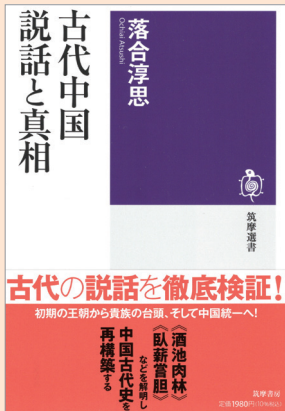
(人文書院、二〇二三年五月三〇日)



『論語』『孟子』『周礼』などの儒教經典、伊藤仁斎や荻生徂徠の儒学、麻疹・痘瘡・腸チフスなどの疫病、東アジアの国際情勢から様々な影響を受け、絶えず変容し続けた近世日本の医学。古方派医学の「四大家」である後藤良山・香川修庵・山脇東洋・吉益東洞が実践した「復古」の多様性を解き明かし、彼らを近代医学的評価から解放する、近世日本医学史を再定位する意欲作。

落合淳思『古代中国 説話と真相』

(筑摩書房、二〇二三年七月)

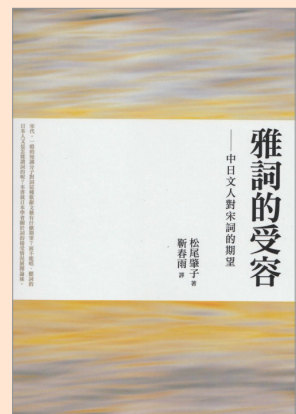


本書は「酒池肉林」や「臥薪嘗胆」など、よく知られた説話の虚構性を指摘し、また実態の歴史を解説している。古代中国については、事実よりも創作された説話がよく知られており、それが歴史学研究の大きな障害になっている。説話の検証は科学的な研究

のために必要である。第一部(一〜四章)は新石器時代から西周代、第二部(五〜八章)は春秋時代、第三部(九〜十二章)は戦国時代から秦代を対象としている。

松尾肇子著、斬春雨訳『雅詞的受容——中日文人对宋詞的期望』

(萬巻樓圖書股份有限公司、二〇二三年八月)

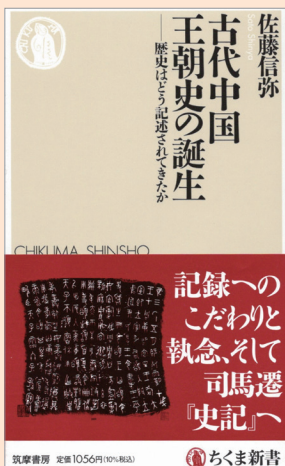


「詞」は唐代におこった流行歌だが、宋代に至って知識人が制作に参加したことで時代を代表する文芸に成長した。第一部「宋代詞人の人生と詞」では、北宋後期から南宋初期までの五人の詩人の作詞術を分析し、世相の中で流行歌に求められたものを考察した。入した詞の、中世から近世における受容の様相を探究した。

佐藤信弥

『古代中国王朝史の誕生——歴史はどう記述されてきたか』

(ちくま新書、二〇二四年一月二日)



殷代における記録のはじまりから周代の金文に見える歴史認識、『春秋』等東周時代の史書の登場、諸子百家の歴史観、そして古代の史書の総まとめと言うべき司馬遷『史記』の編纂まで、古代中国の歴史認識および歴史叙述のあゆみをたどる。